第１分科会　話すこと・聞くことⅡ

「ことばを蓄え、ことばを生かす国語教室の創造」

～話合い活動を充実させるための効果的な指導法の研究を通して～

１　研究のねらい

我々は社会生活だけでなく日常生活においても、様々な場面で人と話し合い、調和したり、課題を解決したりしながら生きている。したがって、実生活で生きてはたらく「話し合う能力」を身に付けさせることは国語科にとって重要な指導事項である。学習指導要領解説には、「話合いは、話すことと聞くことが交互に行われるところにその特徴がある。それぞれの生徒が話し手でもあり聞き手でもある言語活動である。そのため、話すことに関する指導事項及び聞くことに関する指導事項との密接な関係を図って指導するようにする。」とある。また、話合い活動は話すことと聞くことが同時に展開し、話す際に発せられる音声言語は一過性のものであることも特徴の一つである。それ故に、充実した話合い活動の学習を成立させるために次のような点で指導の工夫が必要である。

（１）　班編成
（２）　テーマ設定
（３）　話合いの技能指導
（４）　評価

日向・東臼杵地区では、話合い活動を充実させるための効果的な指導方法を研究し授業実践することで、「話合いによって自分の考えをまとめたり、広げたりし、課題の解決に向けて互いの考えを生かし合う生徒」の育成を目指した。

２　研究の内容（実施　第２学年）

（１）　班編成

生徒同士の話合いによって学習が展開する本領域では、学習の目標を達成するために班編成の工夫がより重要となる。そこで、本研究では、「話し合いで考えを広げよう～パネルディスカッション～」（東京書籍）においてその実践を行った。少人数での話合い活動を通して、生徒全員に学習目標を達成させるには意図的な班編成が必要である。そのために、教師は話合いに関する生徒の能力の把握と、人間関係の把握をしておかなければならない。そこで、話合い活動に関するアンケート調査（補助資料）を生徒及び他教科教員に実施するとともに、これまでの授業及び生活の様子の観察から生徒の実態を把握し、次の点に留意して班編成を行った。

①　話合いに関する能力がＡ評価と判断される生徒を各班に１名は入れる。
②　各班で話合いに関する能力が偏らないように考慮する。

（２）　テーマ設定

話合いの学習におけるつまずきの一つに、生徒が話合いに意欲をもてないということも挙げられる。また、意欲はあったとしてもそのテーマに対する意見をもつことができないことも話合いが充実しない要因となっている。そこで、テーマ設定の段階で次のような工夫を行った。

①　話合いの方法・形態に合ったテーマを設定する。
②　テーマに関する知識や情報を生徒にもたせる。あるいは、新たな知識や情報がなくても話合いが成立するようなテーマを設定する。

（３）　話合いの技能指導

話合いは、話すことと聞くことが同時に行われる活動なので、その両面の力を高めることが必要である。本地区では「話す技能」「聞く技能」「話し合う技能」について、３年間で身に付けさせたい能力を明確にした。（表１）

（表１）身に付けさせたい能力

話す技能	聞く技能	話し合う技能
○　相手の反応を踏まえて補足したり言い換えたりする。（1） ○　反論や意見を予想して説得力を高めて話す。（2） ○　資料や機器などを活用して分かりやすく話す。（2） ○　聞き手に問いかけたり質問したりして相手の理解を確認しながら話す。（3）	○　質問して足りない情報を引き出す。（1） ○　全体と部分、事実と意見を聞き分ける。（1） ○　自分の考えと比較し、反対や賛成などの判断をする。（2） ○　話の要点を理解し、話全体がどうまとめられているか考えながら聞く。（2） ○　根拠を確かめて判断したり、自分の考えとの違いを聞き分けたりして意思決定に役立てる。（3） ○　話し方に注意して評価しながら聞く。（3）	○　話合いの話題や方向をとらえ、建設的な態度で話し合う。（1） ○　互いの発言を検討して共通点や相違点を聞き分けたり、別の立場や視点から考えたりする。（2） ○　課題の解決に向けて互いのよさを生かし合う。（3） ○　話合いが課題の解決に向かうよう進め方を提案したり、進行に協力したりする。（3）

また、県の研究部提案の「蓄えたい学習用語集」を参考に、前述の各能力を身に付けさせるために、地区独自で「学習用語集（話合い活動）」を作成し、授業実践に生かしていくこととした。（補助資料）

（４）　評価

話合いは、その技能を生かして活動を活発に行うことができたかどうかだけでなく、自分の考えをまとめ、広げ、課題の解決に向けて互いの考えを生かし合ったかも評価の対象となる。そのためには、生徒の発表や聞いている時の様子を観察するだけでなく、発言や聞き取った内容も把握しなければならない。そこで、評価の工夫として次のような手立てをとることにした。

①　自己評価

ア　評価の観点を明確にし、生徒自身がこの学習によって自分にどのような力が身に付いたかを自覚できるようにする。

イ　教師が生徒の考えの広がりや深まりを把握するために、自己評価には話合いのテーマに関して話合い前後の考えの変化や、その変化が誰のどの意見に基づいたものであるのかを書く欄を設ける。

ウ　ＶＴＲやボイスレコーダー等の機器を生徒自身の振り返りや教師の評価に活用する。

②　相互評価

ア　話合いの中で、良いと思う発言内容や発言者等を記録させ教師の評価にも生かす。

イ　学級を半分ずつに分けて話合いを行う等の手立てを取り、生徒全員が他者の評価をするとともに他の班から学び合う機会を設ける。

ウ　的確な相互評価を取り上げて、どのような視点が優れているのかを紹介する等して生徒の評価能力を育てる。

３　研究の成果と今後の課題

（１）　研究の成果

①　班編成に他教科の先生からの意見を反映させたことによって、新たな話合いのリーダーを選ぶことができた。

②　「評価の観点」「蓄えたい学習用語集」を明示することで、生徒自身が何を身に付けるべき　　かを意識しながら学ぶことができた。

③　ＶＴＲやボイスレコーダーを活用することで、生徒自身の客観的な振り返りを促すことができた。

（２）　今後の課題

①　国語科を中心として、各教科での話合い活動のリーダーをどのように育成すればよいか。

②　思考や表現を苦手とする生徒に対して、どのような支援をすればよいか。

③　評価の観点を精選し、一単位時間や一単元で身に付けさせたい力を、どのように指導すればよいか。